

新たな冤罪を許してはなりません

白バイ・スクールバス 衝突事件……………高知

■ 衝突事故発生！

平成 18 年 3 月 3 日、高知県春野町の国道 5 6 号線で高知県警の白バイと仁淀川町スクールバスの衝突事故がありました。

この事故は白バイ隊員が亡くなられるという重大な結果となっています。

事故後、スクールバスの運転手の片岡さんは免許を取り消され、11 月に業務上過失致死罪にて起訴、19 年 1 月から高知地裁にて公判開始、6 月に禁固 1 年 4 ヶ月の地裁判決がくだされました。

高松高裁での控訴審も即日結審となり、19 年 10 月 30 日の高裁判決も実刑 1 年 4 ヶ月となっています。

■ 事実は違う！

しかし判決は事実とは全くかけ離れた、警察・検察の証言に基づいて下された物でした。

この過程において不自然で、納得のいかないことが数多く噴出しました。それは警察・検察の証拠捏造とそれを検証もしないで、検察の主張を丸呑みした判決です。

以下順を追って説明いたします。

■ スクールバスは止まっていた

事故当時、片岡さんは卒業遠足の中学 3 年生 22 名と 3 名の教師計 25 名をバスに乗せて、交差点を横断して反対車線手前の中央分離帯付近で停止していました。そこへ右折車線を走行してきた白バイが衝突してきた事故でした。

片岡さんは土佐署での取調べではそのように事故の状況を主張しました。ところが 18 年 10 月の高知地検での事情聴取の際に、片岡さんに突きつけられた事故検分調書や片岡さんの供述調書の内容は、片岡さんの主張とは全く違うものとなっていたのです。

警察の調書では、片岡さんの運転するバスは、「安全確認不足のまま国道に進入し、走行してきた白バイを跳ね飛ばして、隊員を死亡させた」となっていました。

■ 捏造された写真

片岡さんは事実と違うと激しく抗議をしたのですが、検察官は受け入れてくれず、ある 1 枚の写真（左写真）を片岡さんに提示しました。その写真には道路上に 2 本の黒い線が写っていたのですが、検察官はそれを『バスのブレーキ痕』であるとして、「あなたは白バイを跳ねた後、急ブレーキをかけて、倒れた白バイを 3 m も引き摺ったのだ」と言い放ちました。

■ 乗客の証言を無視

バスに乗っていた中学生や引率の教師も「停止していた時に衝突



してきた」と言っています。停まっているバスが急ブレーキを掛けるはずもなく、ブレーキ痕もつくはずがありません。「このままでは罪をきせられる」と感じた片岡さんは梶原守光弁護士に弁護を依頼し、裁判にて事実を明らかにする決意をしたのです。

■半年後に出た「スリップ痕」

事故当日、片岡さんは現場検証もしないままに現場から引き離されて、土佐署に連れて行かれました。片岡さん不在の間に、警察関係者だけで現場検証が行われました。およそ1時間後に現場に戻った片岡さんは車内から指をさすだけの、形だけの現場検証が行われましたが、この時に片岡さんは事故現場でスリップ痕を見せられてはいないのです。

事故後半年以上経って地検にて初めて「捏造されたと思われるブレーキ痕の写真」を見せられるまでは、片岡さんは相手が亡くなっているということを実感し、事故の過失割合も争うつもりもなく。保険会社に対しても最大限の保険の支払いをお願いしたり、1年間の免許取消しの行政処分にも不服申し立てもしないでいました。

■無視された3人の目撃者

19年1月からの高知地裁の公判にて弁護側証人として、バスに乗っていた教師。バスの後ろから事故の瞬間を目撃した品原仁淀中学校長。そして 白バイの高速運転を目撃したAさん達3人が法廷に立ってくれました。交通事故裁判で目撃者が3人も立つということは大変珍しいことです。しかし証人達の『バスは停まっていた』と言う証言は、「スリップ痕写真という客観的証拠があるから、証人の証言は信憑性にかける」として採用されませんでした。

■捏造写真に対する弁護側の主張

それに対し弁護側はその写真は捏造されたものであるとして、次のような主張をしました。

- ①仮にバスが動いていたとしてもABS装着車であるからブレーキ痕はつかない。
- ②仮にABSが作動しなくても、一旦停止後6.5M進んだ地点で急ブレーキを踏んでも1mものスリップ痕はつかない。
- ③スリップ痕の写真自体の不自然さ
- ④実際にバスを走行させての实地検証をするべき。
- ⑤乗っていた乗客は止まっていたと証言し急ブレーキの衝撃は感じていない。

■片岡晴彦さんを支援する会

■会長／高木 幸彦 ■事務局／090-3780-2081

■所在地／高知県吾川郡仁淀川町長者乙2494

支援する会のHP <http://www.geocities.jp/haruhikosien/>

片岡さんのブログ <http://blogs.yahoo.co.jp/zassou1954/>

■「スリップ痕はなかった」

目撃者の品原校長は証言の中でブレーキ痕について、「事故後1週間後に現場を訪れたがスリップ痕はなかった」と証言しました。品原校長以外にも、事故現場を訪れた人でスリップ痕を見た人がいません。しかし、片多裁判官は、こういった疑問点や証言を「衆人環視の中でスリップ痕捏造はできない」として却下したのです。

■「禁固1年4ヶ月」の実刑判決

高知地裁片田裁判官は被告の片岡さんに反省の色がないとして「禁固1年4ヶ月」の実刑判決を言い渡したのです。

片岡さんは3人の証人の証言や捜査の違法性、ブレーキ痕の不自然さを根拠に、事実の主張をしたのですがそれを反省の色が無いと判断されたのです。片岡さんは即日控訴しました。

■「審理は尽くされている」？

19年10月4日に高松高裁の第1回公判が開かれました。片岡さんは新しい証拠や証人を用意して、公判に臨んだのですが、高松高裁の柴田裁判官はこれらの証拠や証人を次の理由にて、全て却下しました。「高知地裁で審理は尽くされている」そして、即日結審を言い渡しました。

これでは、2審の意味が無いではありませんか！？

何のために高等裁判所があるのでしょうか！？

弁護側が用意した新証拠とは、交通事故鑑定人による事故の形態やスリップ痕を物理的に解析した鑑定書や衝突直前に生徒が撮影したバスの車内の様子が写っている写真です。そして、その事故鑑定人や写真を撮影した高校生本人が証言台に立つ予定でした。そして10月30日の高裁判決は地裁と同じ1年4ヶ月の判決となっています。その判決を不服としまして片岡さんは最高裁に上告しております。

■つづく 支援活動

以上が事故後から最高裁上告までの流れです

支援する会の今後の活動は、裁判所に提出したいとしています。請願書への署名活動を行っていくと同時にHPや講演会等でこの事故を少しでも多くの人に知って頂く事と、片岡さん一個人では到底賄うことの出来ない裁判費用、弁護士費用を少しでも援助できればという思いで支援活動をしています。

■情報提供はこちらまで

FAX 番号 0889-32-2313

メールアドレス zassou1954@yahoo.co.jp